



天一坊事件異聞

首卷き春貞

松平春貞一代記

外伝

松田純一

mactechlab.jp

首卷き春貞(外伝)

天一坊事件異聞

松平春貞一代記

表紙デザイン junichi Matsuda

主な登場人物

・松平春貞

通称首巻き春さん。本名は松平春貞。尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子。尾張第六代藩主徳川継友とは腹違いの兄弟。尾張柳生新陰流免許皆伝。

・永井幸江

春貞の新妻。尾張藩江戸上屋敷、江戸家老永井主水の一人娘。柳生新陰流の遣い手。初産で理子誕生。

・沙代

春貞の育ての母

・小川笙船

小石川養生所肝煎。本道(内科)の医者。江戸の町に住む貧しい病人の現状を目安箱へと訴え出したことが八代將軍吉宗の目に止まり、小石川養生所開設が命じられた。

・小川隆好

笙船の息子。養生所の二代目肝煎

・弥三郎

養生所に吉宗自らが送り込んだ腕利きのお庭番。後に春貞の屋敷で働くようになり、春貞の軍師的存在

・米道格左衛門

尾張御連枝松平家時代の春貞の友。春江館館長

・留吉

春貞らに命を助けられたことから屋敷の下僕として働くことになった

・永井主水

尾張藩江戸上屋敷の江戸家老。永井幸江の実父

・大岡越前守忠相

南町奉行

・伊丹鉄太郎

南町奉行所、定町廻り同心で春貞の親友。一刀流の遣い手

・深雪

養生所に眼病で入所していた後家。伊丹鉄太郎の幼なじみで伊丹鉄太郎と夫婦になる。

・八重

小石川養生所の賄中間だったが伊丹・深雪に請われ、深雪の世話人として伊丹家に奉公することになった

・徳川吉宗

徳川第八代將軍

・徳川継友

尾張藩第六代藩主。松平春貞とは腹違いの兄弟

・堀田万之助

尾張藩江戸藩邸劍術指南役および江戸家老永井主水の用人。後に春貞の一頭に加わる

・定吉

小石川金杉水道町を縄張りにする地元四代目の十手持ち

・政五郎

室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭

・岩次郎

須田町で十手持ち兼金貸しの二足のわらじを履く嫌われ者

・長兵衛

日本橋元鳥越仏壇仏具商／太子堂の当主だったが隠居

・夏穂

太子堂長兵衛の一人娘。春貞夫婦の養女となり米道格左衛門と夫婦になった。

・相模屋清右衛門

日本橋両替商相模屋当主

・三井八郎右衛門

駿河町の呉服商越後屋の隠居

・山田浅右衛門吉時

公儀御試御用を勤める一方で斬首刑の執行を依頼されたことから人斬り浅右衛門、首切り浅右衛門などと呼ばれた。吉時は二代目だが山田浅右衛門家では事実上の初代として扱われている

・ 浅草弾左衛門

関八州の穢多え身分たを支配し、下級刑吏による治安維持、死んだ牛馬処理と革製品製造販売はもとより燈芯の専売や遊女屋、芸能民、非人をもその支配下に置いた強大な力を持っていた

首卷き春貞（外伝）天一坊事件異聞 目次

第一章 御落胤現る 九頁

第二章 大岡忠相の苦惱 二二頁

第三章 お白洲の対決 三七頁

あとがき 五五頁

第一章 御落胤現る

一

享保十三年正月早々、春貞の妻幸江がにわかにな産気づき、その混乱を狙ってか尾張の忍びと思われる一群に屋敷が襲われたものの、公儀御庭番たちの助っ人もあつて辛うじて攻撃を防ぎ難を逃れた。

賊の屍が転がり、血の海となつていた屋敷の庭に留吉が産婆を連れて来た。

留吉は門前に立つたとき、一瞬でなにがあつたかを察した。

「お婆さん、済まねえが眼を瞑ってください。あつしが手を引きますのでな」

産婆も一瞬戸惑つたが血の臭いを嗅いで、

「留吉さんとやら、大事な。婆は血には慣れておるでな」

そう言いながら素直に留吉に従い離れの産室へと向かつた。

そしてその夜の未明に女の子が誕生し、松が取れた翌日に来訪した時の八代將軍

吉宗により「理子^{まさこ}」と名付けられた。

ところで屋敷の主人の本名は松平春貞。尾張柳生新陰流免許皆伝の男だったが、尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子であり、したがって尾張第六代藩主徳川継友とは腹違いの兄弟にあたる。さらに八代將軍吉宗自ら殺生与奪の命を受けたただ一人の武士^{もののふ}であった。

一一

暑い盛りになった頃、弥三郎が驚愕する情報を伝えに戻ってきた。

「どうした、とつつあん。公儀御庭番の神様と言われるとつつあんが嫌に慌てようではないか」

春貞は茶化しながら弥三郎を眼前に座らせた。

「いや、春さん。これはあつしの感ですがな、大事になるように思えましてな。

まずはお耳に入れようと思ひまして…」

いつになく真剣な弥三郎の表情に春貞も真顔になつて頷いた。

「実は…上様の御落胤を自称する者が現れまして…」

「な、なんだと」

思はず春貞も声を上げた。

「く、詳しく話してくれ、とつつあん」

春貞も膝を進めた。

「はい。とはいつても春さん、まだ詳しい話しは聞こえてこないんでさあ。何しろ事が事ですからな」

「うむ」

「仲間からの情報によりますとな、昨年の夏のこと、一人の浪人が関東代官・伊奈忠達様の屋敷を訪ね、南品川宿の山伏常楽院方に上様の血筋で源氏天一坊と名乗る人物がいて、自分が近々大名にお取り立てになると称し、浪人たちを大勢召抱えて役儀などを与えているとの訴えがあつたそうです」

「ほう。無論騙りなんだろうな…」

春貞も不安顔しながら問うた。

なにしろ万一その御落胤が本物であれば、將軍世継ぎに影響するのは勿論、これからの政に大きく関わってくるに違いなく、世の混乱は必定だからである。

「騙りと一笑に付すことができれば事は簡単なんですかあ…しかし…」

「……………」

「ことは御落胤の真偽ですが、もし万一お調べの後で本物だということになれば、いたずらに詮議した役人たちが咎められまさらあ。

あつ、これはありがたいがとうございます若奥さま」

幸江が運んできた茶に頭を下げて手を出しながら弥三郎は続けた。

「したがって代官としてそうそう無茶なお調べはできませんや。とはいっても代官としては上司に報告するにしてもなるべく詳しい事を知らねばなりません」

「そうだろうよ」

「で、その伊奈忠達様は常楽院の名主、地主たちを呼びつけて尋問したんですあ。その取り調べの結果、常楽院方で浪人を集めているのは改行という山伏で、紀州生まれと称し、江戸幕府八代將軍徳川吉宗さま…上様の御落胤だと主張していることが解ったのです」

「そりゃあ代官としては困っただろうなあ」

春貞は天井を仰ぎながら両腕を組んだ。

「その代官はなかなか出来る男のようでございましてな、上司である勘定奉行稲生下野守正武さまに報告され、指図を仰いだわけでした…」

弥三郎は再び茶で口を湿らせてた。

「ふむ。ということは御落胤のこと、上様のお耳に入ったのかい」
春貞は唸るように問うた。

「はい…」

「上様は『それは騙りだ』と申されたのだらうな…」

春貞がたたみ込んだ。

「それが春さん…」

珍しく弥三郎が言いよどんでいるのを見て春貞は、

「まさか、覚えがあるとか申された訳ではあるまいな」
と言ったが、

「その、覚えがおありだと答えられたようなのです」

「なんだと！」

思わず春貞が大声をだした。

弥三郎がどこか申し訳なさそうに身を縮めているのを見て春貞は、

「ぶっ」

と吹き出した。

「なにも、とつつあん。お前さんの御落胤が出てきたわけではあるまい」と笑い、すぐに真顔になった。

「無論、御落胤だと自称する者が本物であるとは決められません、正直な上様はその可能性を否定されなかったわけです」

「ふうむ…」

吉宗は宝永三年（一七〇六年）に二品親王伏見宮貞致親王の王女・真宮理子女王を正室に迎えているが、宝永七年（一七一〇年）に死別し、それ以降は正室を持たなかった。

「上様は五歳から和歌山城におられ、二十二歳で紀州藩主となられたわけですが、確かに御側室は多々いらつしやつたそうですね…」

弥三郎が言うのと、

「うむ。その紀州藩主の時にご長男・長福丸さま（のちの徳川家重）、ご二男・小次郎さま（のちの田安宗武）がご誕生されているしな…」

「はい。上様はあの御器量、幾多の女子も心を寄せられたに違いございませんが、これまでこの種のお話しは無かったのですかな」

「しかしだ、覚えは無いとおっしゃればそれで片は済んだろうが正直なお方よなあ。

それはともあれ、とつつあん。それからどうした」

春貞は暗い顔をしながら弥三郎に話しの続きを促した。

「いや、関東郡代としてもそうなれば単純に騙りだと、天一坊を捕縛するわけにもいかず、時間をかけて調べることになったそうです」

「だらうな…」

「ともあれ春さん、これは一悶着ありそうですぜ」

弥三郎も抜けるような青空を眺めながら呟いた。

「うーむ。しかし御落胤ではないが、我らも厄介なことを抱えておる。早く解決の糸口を見つけないものだな」

「へい。尾張の宗春さまと正面衝突は避けとうございますな」

「そのことよなあ…」

春貞はごろりと畳みに横になった。そのとき、

「なにをため息などされておりますやら、春どの」
乳母の沙代が居間に足を踏み入れながら問うた。

「いや、母上。上様のお身の回りにきな臭い問題が生じたようでごさいますな」

春貞が無難に話を振ると、

「ほう。御落胤でも見つかりましたか？」

沙代が突然話しの確信を当てたので春貞はビックリして飛び起きた。

「は、母上。どうしてそれを？」

「なに、当てずっぽうでございますよ。政のあれこれでは貴方はそんなに暗いお顔はいたしませぬし、上様のお身の回りのこととなればそんなことでごさいますよう」

沙代は平然と言い切った。

沙代は老いても美しい顔を春貞に向け、

「よくあるお話ではございますが、ことがことだけにお調べも大変でございませすな」

と笑顔を向けた。

「母上。よくあること…と申されましたか」

「はい。上様のご器量からしてこれまでそうしたお話しかなかったことの方が不思議でございますよ。のう、弥三郎どの」

話しを向けられた弥三郎は、

「は、はあ」

としか答えられなかった。

「それに、春どの…」

「はい」

「そのお話、そうそう他人事の話しではございませぬぞ。

なにしろ春どのは尾張藩三代藩主徳川綱誠さまの歴としたお子。

尾張第六代藩主徳川継友さまとは腹違いの兄弟でございませぬから、もし『我ここにあり』と声を上げればそれこそ尾張にとってあなた様は立派な御落胤ではございませぬか…」

沙代はしれつと言いつつ切った。

「ち、違えねえ…」

春貞は弥三郎と顔を見合わせて笑った。

すると、沙代はあらたまつて座した体を春貞に向け、

「春どの。話しは違いますが、この婆…ひとつお願いがございます」と言つた。

「はい。なんなりと」

体を起こして座り直した春貞に沙代は、

「幸江さんの父君、主水さまを藩邸からこの屋敷にお引き取りして看病なさいませ」

と言いつつ軽く頭を下げた。

「ほう、それは妙案」

弥三郎も笑顔を向けた。

幸江の実父、永井主水は長い間尾張藩江戸屋敷の家老を務めてきたが、老齡でもありここのところ病気がちだった。

それに信頼できる堀田万之助が側御用人としてついていたからそうそう心配はないと思つていたが、春貞らが尾張と一戦交えることになれば主水にも魔の手が伸びるかも知れなかつた。

「母上、それは俺も考えておりました。

問題は悶着なく藩を辞してこの屋敷にお迎えするには継友の殿にお許しを得なければなりませんでな、しばしお待ちを……」

春貞が答えると沙代は無言で頷いた。

その後春貞はちようど屋敷に滞在していた元小石川養生所肝煎り小川笙船のいる部屋に向かった。

笙船はちようど俳句をひねっているようだった……。

「先生、少々お尋ねしたきことがあります……」
と春貞は切り出した。

「先生、親子は似ると言いますが俺の知る限り、本当の親子でも顔がまったく違う者もおるようです。なにか『間違はなく親子』ということが分かる印みたいなものはありませんかな」

春貞が座しながら問うと、

「嗚呼、先ほど若奥様から少しお聞きしたが御落胤に関与することじゃな」

笙船は筆を置きながらおもむろに座り直し、

「結論からいえば、まあ難しいとしかいえんな」

「だめですか」

「ここを見れば必ず親子とか血縁だと分かる印はまず期待できぬと考えなければならぬ。ただしわしの経験から申せばひとつ気にすべきところは耳だと思ふ……」
笙船は真顔で言った。

「耳……ですか」

「うむ。特に耳の造作と耳たぶの形じゃな。」

春さんはどちらかという福耳で耳たぶが大きめだがわしはいわゆる平耳といつてな、耳たぶが小さい。世間では金が貯まるのは福耳の持ち主だと申すが、だとすればわしは一生金には縁がないということじゃ」
笙船は笑いながら言葉を続けた。

「春さんや。お前さんはきつと公方様の御耳とその天一坊とか申す男の耳を見比べ親子かどうかを判断したいのじゃろうが、決定的なことではないと心得た方がよい。」

しかしこれまた承知のようによく似た親子がいることも事実。まあわしが言えるのは決定的ではないがまずは耳を見比べてみよということじゃな。

承知のように上様の御耳は立派な福耳じゃ。それを念頭に入れて天一坊とやらの耳を見てみることにじゃな」

「なるほど。ご教授ありがとうございました」
春貞は頭を下げながら立ち上がった。

第二章 大岡忠相の苦惱

一

それから半年以上たつた翌享保十四年（一七二九年）、ことは急速に動きを見せた。

三月末のこと、南町常廻同心で春貞の親友でもある伊丹鉄太郎が岡つ引きの定吉を連れて屋敷にやってきた。

早速居間に通された鉄太郎は「ふうっ」と大きなため息を漏らしながら座した。座敷で春貞と共に刀の手入れをしていた米道格左衛門が、

「南町の同心どのがそう深いため息などされて…いかがいたしましたかな」と問うた。

「まさか深雪みゆきさんになにかあつたのではあるまいな」

春貞も思わず口にした。

深雪とは鉄太郎の恋女房である。

「い、いや…すまん。深雪はお陰様で息災に過ごしておる」

鉄太郎は隣の定吉と視線を合わせながら答えた。

「春さん。まずはお奉行からのお言付けじゃがな、明後日七つにご足労を願いたいとのことだ」

と言った。

「ほう、それは容易いことだが、それがため息の原因かい」

悪戯っぽい顔で春貞が問うと、

「いかなな…。どうも俺はこの手の雲を掴むような事件は苦手だな」と断りつつも、

「春さん。言うまでもねえが、この話しはここだけにして貰いてい。なにしろ公方様に関することなのでな」

伊丹は歯切れが悪い物言いをした。

「上様がまた市中で襲われなすったか」
格左衛門が言うのと、

「いや、そうではねえんだ。俺たちとしてはその方がよほど詮議がしやすい…おつと、こんな物言いが知れたら腹を切らねばならぬな」

鉄太郎はそう言いながら己の腹を叩いた。

「もしや、大岡さまのお呼び出しは御落胤の件ではないのかな…」

春貞が呟くと鉄太郎は無言で頷いたが、

「さすが春さん。すでに耳に入っていないさったか」

と初めて笑顔になった。

「うむ。俺には天下一の御庭番がついていてくれるからな」

と春貞も笑顔で返した。

「さて伊丹さん。ということとは、その天一坊なる御落胤を自称する者のお取り調べを大岡さまがなさることになったのかい」

春貞が問うと鉄太郎は頷きながら、

「そういうことだ、春さん。」

どうやら上様の覚えがめでたい大岡さまにご老中や上様ご自身からも依頼があったようなのだ

「ふうむ」

「要は、だ…。」

こんな面倒なことに誰も首を突っ込みたくはねえのさ、春さん。まかり間違えば己の首が飛ぶことになるからな。

本来なら、この一件は町奉行支配地外での事件だからしてお奉行に関わりはないはずなんだ…。」

伊丹はさも嫌だという顔をしながら吐き捨てた。

「大岡さまは貧乏くじを引かれたということか」

春貞も思わずため息をつくと格左衛門が、

「伊丹さん。申すまでもないが肝心なのはその天一坊なる者が本物の御落胤なのか、騙りなのかだな…。」

はつきりしないのですかな」と確信をついた。

「無論まだお調べ中でな、関東郡代から勘定奉行に話しが回り、老中たちも俄に色めき立ったが、誰も猫に鈴を着けようとはしねえ。

そこでお奉行に命がくだったということよ」

鉄太郎も渋い顔をしながら吐き捨てた。

「でな、春さん。ことがことだ。調べるといつても一般の罪人のようにはいくめいし、かといつて最初から殿上人として扱う訳にもいかねえ。

それにいずれにせよ、結論を下されるまでに至るあれこれは極秘にせざるを得まい。大岡さまとしては信頼でき、頼れるお人は春さんしかいねえというわけよ」
伊丹鉄太郎が鬚に手をやりながらすまなそうに言った。

「分かった。俺もなんのつつかえ棒にもならぬだろうが、大岡さまの愚痴をお聞きすることくらいはできるだろうよ…」

春貞が言い切ると鉄太郎の顔がぱあつと明るくなった。

一一

その翌々日、春貞は着流しに首に椿の柄を染め込んだ手ぬぐいを巻いた姿で八丁堀に向かった。腰には父徳川綱誠形見の脇差しだけがあった。伴はあえて連れなかったが、舟は留吉に頼んだ。

「だんなあ。あつしらは公方様の御落胤がどうの…といわれてもピンときませんが、大事なんでございましょうな」

留吉の屈託のない物言いに、

「そうよなあ。下手をすれば天下を揺るがす大事件となるだろうな」

「そんなものですかねえ」

「たとえばだ。留吉、お前が上様の御落胤だとして徳川紋が入った短剣とか、当時の上様のお墨付きを持って御上に訴えたらどうなる…」

「うへえ。メチャクチャな例えでございますな旦那。」

しかし、そんな証拠と共にあつしが御落胤だと証明できたとすれば、あつしは次の日からお城暮らしでしょうな」

「それだけではねえ…。御落胤として正式に認知されれば、それなりの役職や官位が与えられ大きな権限・権力を持つことにならあな」

「でしようねえ」

「それにな、歳から考えれば上様のご長男よりその天一坊たる男は年上。だとすれば長幼之序からすれば次期將軍の声も確かとなろう…」

「うへえ。あつしが將軍様ですかい」

「問題なのは、それまで山伏として暮らしていた男が、いやお前だとすれば偽金作りに加担し、追われて殺されそうになった男に御政道を正しく操ることができるかだ、留吉。」

「なによりも民のためになると思うかえ…」
舟の上で腕を組みながら春貞は機嫌良く問いかけた。

「まあ、あつしには無理でがしようねえ。しかし世の中が己の思うがままになるのであれば、やれ女が欲しい、あれもこれも欲しいと大いなる散財をするでしょうなあ」

櫓の動きを止めずに留吉は空を仰いだ。

「そのことよ。」

不釣り合いの権力を持つところには怪しげな者達が自然に集まるものだろうし、金も動く…。世の乱れこそあつても俺たちにとって良いことなどひとつもないわ
さ」

春貞はそう言い切った。

暫くすると小舟は南町奉行所に近い堀に滑り込んだ。

「留吉。奉行所近くで面倒はないと思うが、気を付けてしばし待っていてくれ」

春貞が命じると留吉は愛用の赤檜の六尺棒を持ち上げ、大丈夫だと意志表示した。

この頃の留吉は弥三郎から棒術を習い始めた頃で、やっと面白味を感じられるようになっていた。

南町奉行所に着くと早速伊丹鉄太郎が待っていた。

「春さん。わざわざすまん」

軽く頭を下げた鉄太郎が先頭に立ち、春貞を奉行の執務部屋に案内した。

「お奉行。松平春貞さまがお越しになりました」

鉄太郎が声を上げると、

「おお、お入りくださいれ春貞どの」

大岡忠相の声が響いた。

「伊丹。ここは春貞どのと二人きりにしてくれ。誰もこの部屋に近づかぬように頼む」

大岡はそう命じて春貞を部屋の上座に誘った。

「大岡さま。俺はご覧のような姿…。お気を使わないでくださいれ」

春貞はそういいつつ、部屋の中央付近に無造作に座した。

「わざわざご足労いただいたのはすでに伊丹よりお耳にお入れいたしました上様御落胤についてでござる」

大岡は春貞の前に座すと同時に核心に入ったが、その表情は憂いを帯びていただけなく疲れが見えていた。

「弥三郎からも一報が寄せられましたので事の概略は承知しておりますが、なにか進展がございましたので」

「こんなことは春貞どの、お手前にしか申せぬ事だが、この大岡：大変苦慮しております。」

郡代の詮議によると天一坊の申すこと：辻褃は合っているのです」

「……………」

天一坊の口上によれば、天一坊は元禄十二年（一六九九年）、紀州田辺の生まれで、母が和歌山城へ奉公にあがった際に吉宗の手が付き懐妊したので実家へ帰され実家で産まれたという。

「ほう。ということは天一坊なる男はいま二九歳ということになりますな」

「はい。」

で、その後は母と共に江戸に下り、母は町人と結ばれたそうだが、母からは

『吉』という字を大切にせよと言われて育ち、親戚筋からは将来公儀からお尋ねがあるだろうとも聞かせられていたという…」

「なるほど。しかし辻棲など周囲を固めればある程度はどうともなりますが、肝心の証拠はございますのか」

「母が由緒書などを持っていたが、焼失してしまつたと答えているという…」

「ふうむ。決定的な物証はないのですな」

春貞がたたみ込むと大岡は、

「いまのところはございませぬ。ただし江戸でのお調べの際には上様から頂戴した短刀を持参すると申しておるそうです。」

とはいえ、御落胤の是非を物証だけで判断してよいものか、この大岡珍しく苦慮しております。

それはともかくその後、十四のとき母が亡くなり、それを機会に出家して山伏となり現在は『改行』と名乗っておるそうです」

「大岡さま。失礼ながらその改行たる人物、素行はどのような男でございませぬか」

春貞は人物の判断は氏素性だけでは心許なく、日常の行いこそ判断の基準となる

と説明した。

「ごもつともですな。しかしまだ調べは始まったばかり。ご指摘の素行については分からない事だらけですが、それがしの立場から見逃せないのが多くの浪人たちを集めているという事実です」

「まさか、由井正雪の真似事でもしようというわけではございませんまい……」

「はい。ただし己が大名に取りたてられたらおのおのに役職を与えると約束しているらしいのです」

大岡は渋い顔をしながら言った。

「なるほど。ずいぶんと手回しがよい男ですな」

春貞が苦笑いすると、

「釈迦に説法なれど、権力を握るには多くの賛同者が必要なことも事実じゃが、反対に御落胤だと言い切る改行の周りには将来の利を夢見て多くの者達が集まってきたようですな」

「……………」

しばし沈黙していた春貞は、

「大岡さま。上様はなんとおっしゃっておられますのか」

と問わずにいられなかった。

「それです。」

すべてお前に任すとの仰せ…。

このお役目、町奉行には些か重すぎるものと困惑しております」

大岡は膝の上に置いた両拳で太股を二度叩いた。

「心中お察しいたしますが大岡様…。」

それではそれがしに何をせよとのお考えでございますか」

と春貞が問うた。

「はい。春貞どのは上様から生殺与奪の命を受けられたただ一人の武士^{もののふ}。まことに申し訳ないが、天一坊詮議の折、障子のこちら側から話しを逐次お聞きいただけまいかと思ひましてな。また人物を見極めていただきたいのです」

そういう大岡の表情は真剣そのものだった。

「承知いたしました」

即答した春貞は、

「で、大岡さま。天一坊が本物であつたらどうなさるおつもりですかな」

と聞いた。

大岡は、

「そのことについても貴殿と話しをしたかったのです」
二人の密談はその後半時ほども続いた。

三

翌月の四月、参勤で江戸にやってきた尾張藩第六代藩主、徳川継友だったがかなりやつれていた。春貞に示唆されていたにもかかわらず、藩の不平分子の力が意外と大きくなったことを嘆くと共に、春貞や吉宗に弓引く分子がいたことを悔やみ大きな借りを作ったことを悩んでいた。

そんな継友から春貞は二つの許しを得た。

ひとつは元尾張藩江戸家老、永井主水を春貞の屋敷に引き取って看病すること。そしてこれまた江戸藩邸の剣術指南役にして主水の懐刀である堀田万之助が藩を

辞し春貞の屋敷で奉公することだった。

春貞にとってこれが実現すれば尾張と全面戦争になっても悔いはないと考えたが、長い間江戸家老の職に付いていた主水のことだ。職務の引き継ぎも多くすくにとはいかず結局その年の七月になってやつと一緒に暮らせることになるのだが…。

ところで天一坊の調べは大岡越前の思惑により白洲で行われることになったが内与力の佐竹弥五郎らは、

「お奉行、万一天一坊が本物の御落胤であったとき、お奉行が責められます。ここはその…万一をお考えになり屋敷内でのお取り調べになされた方がよいのでは…」

と懸念を示したが、

「よいか。今回のお調べは己が御落胤だとふれ回っている者の詮議だ。また不逞の輩をいたづらに集めているという訴えにもよる詮議ぞ。したがって我らの腰が引けていては最初からやつらの主張を認めたことになる」
大岡はそう強く主張した。

「しかし、お奉行…」

佐竹は勿論、同心たちは青い顔をしていたが、

「なに、万一の場合はこの奉行が腹を切れば済む事よ」と大岡は言い切った。

第三章 お白洲の対決

一

お白洲とは「砂利敷」に敷かれた砂利の色に由来し、その上に敷かれた藁に原告・被告らが座らされた。ただし、武士（浪人を除く）や神官・僧侶など特定の身分の者達は「砂利敷」ではなく、二段に分かれた座敷の縁側に座らされた。そしてその日がきた…。

天一坊はまるで大名行列と見間違えるほどの目立つ陣立ちで江戸八丁堀に現れた。しかしお白洲に入れたのは天一坊ただ一人であり、家老を自称する赤川大膳ら一行は奉行所の外に留め置かれた。

さて、お白洲の公事場とよばれる最上段中央には大岡越前守忠相が座し、脇には勘定奉行稲生正武が、そして縁側端には佐竹弥五郎が座していた。ただし公事場背面の障子裏には春貞と弥三郎そして堀田万之助が控え、聞き耳を

立てている。そして伊丹鉄太郎ら同心は砂利敷の砂利の上に控えていた。

「これより、そこに控える天一坊なる者が畏れ多くも上様御落胤と申し出た件につき吟味をいたす」

大岡のおちついた声が吟味の始まりを宣言した。

「早速じゃが、名を申せ」

縁側上段に座らされた長身総髪の男は不満そうな顔をしながらも、

「天一坊改行である…」

とよく通る声で答え、続けた。

「天一坊改行、幼名半之助と申す…。しかしお奉行、御落胤のそれがしを白洲で詮議とは笑止。御身の評判に傷が付くのではございますまいか」

背筋を伸ばした天一坊が顔色一つ変えずに言い放った。

刹那、

「控えい！天一坊。ここは確かに紛れもなき白洲。この詮議はその方が申すとおり本物の御落胤であるかどうかを調べる場じゃ。」

己を御落胤とふれ回り、多くの浪人たちを集め、己が栄達の際にはそれぞれ相應の禄と身分を与えると扇動した訴えでその方はこの場に座しておる。

よいか…。

万一その方が本物の御落胤であるとすれば上様の御側近くで政を行う立場となる…」

天一坊は自信満々に頷いている。

「徳川幕府の安泰を願ひ、民の幸せを願うのが御上のお役目。物事の道理と御定法に則った詮議を無視しようなどと言う者は人の上に立つに相応しくはない。その方はいま、訴えられた罪人じゃ。立場を弁えぬとあらば上意でこの場における奉行をも侮蔑することになる。」

求められたとおり、素直に申し開きをせよ天一坊」

大岡忠相は正すように声を上げると天一坊の表情が些か和らいだように思えた。大岡は一呼吸した後で、

「天一坊とやら、吟味の始めに申し伝えておく。」

己が御落胤であるとは嘘であったと申し開きできるのは今しかないがどうじゃ。今なら後戻りできるやも知れぬ…」

諭すように大岡は言い放ったが天一坊は、

「今更何を申すか。我を御落胤と公儀に認めさせようとこの場に参ったのじゃ」

とせせら笑った。

大岡は些か残念そうな表情をしたが、

「然様か…。では吟味を始めることにする」と姿勢を正した。

「さて、調べに寄れば、天一坊：その方は元禄十二年紀州田辺の生まれ。母よしが和歌山城にご奉公に上がった際に懐妊したので実家へ帰されて産まれたという。その後、母とともに江戸へ下り、母は町人と縁づいた。

よろしいか」

「いかにも」

「その方の母は、その方が十四の年に亡くなり、それを切っ掛けとして出家し山伏となったとあるが、その方が己は御落胤であると思っただのはなにが切っ掛けじやったのか…」

「それは母から聞かされたからである。『お前は高貴なお方の子』『将来公儀からお尋ねがある』といったこと、そして『吉』という字を大切にせよということとを物心がつく前から常々口にされていたらしい…。

こうしたことから子供の時より我は上様の御落胤との思いを日に日に強く感じる

ようになったのじゃ」

「うむ。母が『吉』という字を大切にせよとその方に直接申したのじゃな」

「いかにもさよう」

「物心がつく前からと申したが、その方が物心がついたとは何歳のころからを申すのじゃな」

大岡は執拗に迫った。

「それがしは己で申すのも些か憚れるが、幼少から利発な子と知られておった。したがって三つ四つから耳タコのように聞かされた覚えがある」

と天一坊は胸を張った。

「しかしな、天一坊。『吉』という字が名に使われた文字とは限らぬし、人の名だとしても『吉』の字を持つお方は多々いよう。

なぜにそれが上様…吉宗様と結びつくのじゃ」

大岡越前の話し方は当初とは些か違い、穏やかになっていることを公事場裏で聞いている春貞らは気がついていった。

「お奉行、よろしいか。それがしは紀州生まれで母が城にあがっていたときに懐妊した。『お前は高貴なお方の子』だ『吉』という字を大切に…となれば誰でも

が上様のお名を思い浮かべるであろう。

そうではありませぬかな…」

大岡はそれには反応せず問いを続けた。

「その方が御落胤であると主張する背景は承知した。では物的な証拠があると聞いておるがこの場で吟味いたす」

佐竹弥五郎が天一坊に近づき、一振りの短剣を恭しく受け取り大岡に渡した。大岡は一瞥しただけで佐竹になにやら耳打ちし、佐竹はその短剣を公事場裏に潜んでいる春貞に見せに行つた。

無論天一坊は松平春貞云々は知らぬし、その人物が奥に潜んで話しを聞いていることも知らなかつた。

「天一坊。お刀はいま詳しい者に見分かせてもらつておるのでしばし預からせてもらうが、その間に吟味を続ける…」

天一坊は無言で頷いた。

「物的な証拠はいまの短剣しかないのですかな。なぜなら、短剣に限らず物品は他から譲られたり盗んだりできるでな…」

「な、なにを無礼な」

天一坊の顔が怒りで赤くなった。

「お座りなされ。短剣にその方の名が刻まれているのであれば話しは別じやが、他に上様のお墨付きのような書付はなかったのか…」

大きな息を吸った天一坊が怒りを抑えながら、

「母がいただいた由緒書を持っていたというが、あるときの火事で焼失したときいておる」

「ということは物的証拠はあの短剣だけということでござるな」

「いかにも。それだけで何の不足もございませんまい」

と天一坊は胸を張った。

「ところで、何故浪人たちをあれほど集められたのか。ご返答願いたい。調べに寄れば浪人たちはもとより近隣の商家からも大枚な金を集めているというではないか…」

大岡は静かに話しを進めた。

一方、公事場奥では春貞と弥三郎が別途控えさせていた堀田万之助と共に短剣が本物であるかを検証していた。堀田は尾張藩江戸上屋敷の剣術指南役というお役目の関係上、刀剣の目利きには定評があったからだ。

「どうだ堀田どの。これは上様のお手から出た一振りであろうか…」

春貞がたたみ込むと、外した目釘を元に戻しながら万之助は、

「この徳川紋の作り、そして無名ながらも名刀には違いなく、そこいらに多々転がっている一振りではございませぬ。

本物と見て間違いございませんでしよう。

ただし…」

「……………」

「短剣が本物だとしても由来がはつきりしているわけではございませぬ。したがってこれが上様から天一坊の母に渡されたものであるかの検証は無理でございませぬ」

と言いつつ切った。

同席の佐竹は春貞らに頭を下げて短剣を受け取り、公事場表の大岡に静かに歩み寄り、大岡の耳に何ごとかをささやいた。

無言で頷いた大岡の表情には憂いに満ちた微笑のようなものが感じられたがすぐに奉行の顔に戻った。

それを横目に見ながら天一坊は、

「それがしが浪人を集めたのではござらぬ。浪人共がそれがしの身分を知り、仕官が叶うであろうと物品などを持ち集まつてきたのでござる…」

「しかし天一坊。そなたの家来と自称する常楽院（天一坊の家老と称して赤川大膳を名乗っていた）らによれば、そなた自ら『大名になったらそれなりの身分で取りたてる』と口にしていたと証言しておるが、いかに…」

「大岡どの…」

天一坊は今日初めて大岡に「どの」を付けて呼んだ。

「人の心は弱き者。それがしの将来に一途の希望と望みを託して集まつた者達…。それなりの夢は見させてやろうと思うたまでのこと。他意はござらぬ。それに…」

「うむ。それに…」

「それがしがあえて御落胤と自称してきたには切実な思いがあるのじゃ」

天一坊の表情も和らいでいた。

「申してみよ」

「それがしが御落胤であることは疑いなきこと。しかし、大岡どの。御落胤と世間に口を開かなければそれがしは父に、上様にお会いできぬであろう。」

違いますかな：」

「ふうむ」

「子が親に会いたいと思うのは自然の摂理。

大岡どの、あなたの父親はあなたが生まれたときから側におられたはず。そして慈しみ育ててくださったに違いあるまい：。

しかしそれがしは父の面影さえ知らぬ男なのだ。その父親が誰であるかが分かった暁には是非にも会いたいと考えて何が悪いのか。

無論父は天下の公方様：。会いに行けば簡単にお会いくださるというお方ではありませぬ。

ただ：ただ大岡どの。それがしが公方様の子として生まれたいとして生まれたわけではござらぬ。いつそ父は長屋の熊さん八つつあんであつて欲しいと思つたことか：。それなら簡単に会いに行く事ができましようぞ。

しかしそれがしの父はまごう事なき天下の征夷大將軍。そうは行き申さぬ。

『それがしは紀州田辺の生まれで母よしの子でござる』と申したところで誰も耳を貸そうなどとはしてくれませぬ」

天一坊は悲しそうな顔をうつむき加減にしながらも続けたが大岡も敢えて話しを

差し挟まなかった。

「しかし、ことは上様の御落胤であると訴えれば話しは違うであろう。

先の浪人たちではないが、向こうから利を求めて集まってくるし、こうして公儀のお調べの場につくこともできた。

ましてやその御落胤は真のことなのだから大岡どのとて事実を曲げることはできませんぬ」

再び天一坊に不適な微笑みが浮かんだ。

その刹那、

「黙れ！天下を欺す大かたりめっ」

大岡忠相が珍しく大声を出したので佐竹や白洲に座していた同心一同に動揺が走った。

「な、なに…。騙りと申すか」

天一坊が思わず片膝付いて立ち上がろうとしたが役人らに押しえ込まれた。

「子が親に会いたいという心情はこの大岡も人の子。分からないはずもない。しかし天一坊、その方の一連の証言には大きな綻びがある。

ともあれ、先の生い立ちや御落胤を自称するに至る話は誠のことだと申しした

な…」

「い、いかにも」

「では聞かせようぞ。」

その方が御落胤だと自称する根拠の主なものに、母から『吉』の字を大切にしろという言いつけがあつたというな。その話から上様の御名が結びついたとな…」

「うむ」

「よいか、良く聞け天一坊。」

そなたが生まれたのは元禄十二年六月七日。しかし上様はそのとき吉宗さまと名乗られてはいないのじゃ。

上様が「吉宗」と名乗られたのは第五代紀州藩主になられた宝永二年からで、それまではよりかた頼方という御名であつた。

藩主ご就任に際し、將軍綱吉さまから偏諱を授かり、吉宗と改名されたのであり、お主が三つ四つするとき母の申したという『吉』の字が上様を意味するはずはないことは明らかじゃ…」

白洲に得も言われぬ緊張が走つたが当の天一坊は呆然としていた。

大岡は脇士に座していた勘定奉行稻生正武と頷きあつた後、

「判決を申し渡す。

天一坊とやら、上様御落胤と偽りて人心を惑わし、みだりに不逞の浪人共を多数集めたことは許しがたし。

余罪ことごとく調べ尽くし、極刑を申しつけるものなり」

一呼吸した大岡は、

「天一坊、立ちませい。

ご一同、ご苦勞でありました」

名奉行の顔に戻つた大岡はくるりと白洲に背を向けたが、役人らに四方を囲まれた天一坊はその背を睨み続けていた。

二

天一坊は四月二十一日に死罪となり鈴ヶ森で獄門となつた。そして天一坊のもと

に集まっていた常楽院や浪人たちも皆遠島や江戸払いとなり、名主や地主も罰を受けた。一方検拳の端緒をつくった浪人本多儀左衛門には銀五枚の褒美が授けられたという。

ちなみに獄門とは、庶民に科されていた死刑の一つで斬首刑の後、刎ねた首を台に乗せ二晩見せしめとして晒しものにする公開処刑であった。また斬首刑の後の死体を刀の試し斬りに使う場合もあった。

数日後、春貞の姿は再び南町奉行所にあった。

「春貞どの。あらためて礼を申します」

大岡忠相は春貞に頭を下げたがその顔には悲壮感が漂い、かなりやつれていた。

「お役目とは申せ、お疲れ様でございましたな」

春貞はそう大岡を労った。

しばし無言でいた大岡がいきなり、

「それがしは：上様のお子を獄門台に送ったかのも知れませぬ…」
と呟いた。

春貞は大岡の心中を察し言葉を発しなかった。

先に大岡と春貞が密談したとき、いわば結論は出ていた。大岡も春貞も御落胤はあつてはならないという点において意見の一致を見ていたのである。

「大岡さま。あまりご自身をお責めになつてはなりません。」

大岡さまは江戸町奉行として判決を申し渡しましたが、それがしも剣こそ抜きませなんだが、殺生与奪の権利を行使したも同然、いわば大岡さまの共犯者でござる。」

春貞が呟くと初めて大岡に笑みが浮かんだ。

「春貞どのと共犯なら、思い残すことはございませぬな。」

大岡は笑いながら春貞と視線を合わせた。

「その後、上様からなにかお言葉がございましたのか。」

春貞が問うと顔を左右に振った大岡は、

「上様は何も申されませぬ。大岡に任せただから口出しすることではないとお考えくだされているのでしよう。ありがたいことですが、辛いことでもありますな。」

と苦笑した。

大岡は御落胤が本物か否かにつき念密な調査を命じたが、状況証拠からいえば本

物の御落胤である可能性も大だった。

「春貞殿。それがしも子の親。取り調べをしながらも、もし天一坊が自ら御落胤というのは騙りだったと言いついて出してくれないかと願ったりもしましたが、思えば可哀想なことをいたしました」

大岡は自らの膝でも眺めるように俯きながらぼつりと言い放った。

「はい。真か嘘かはともあれ御落胤などと吹聴しなければ山伏として静かな一生を終えられたのかも知れませんが、この種のことは本人以上に周りが騒ぎ立て持ち上げることになりやすいと聞きます。

天一坊にとって不幸でございましたな」

春貞も瞑目し心の中で手を合わせた。

天一坊の母が『吉』の字を大切にと言いつつ続けたのが本当で、天一坊が六歳以降にその話を聞いたのであれば、紀州藩主徳川吉宗は誕生していたわけで、母親は

「あの時のお方が吉宗さまとなった」と知つて「吉」の字を大切に思えと呟いたのかも知れなかった。

天一坊の母親は供述によれば正徳三年（一七一三年）まで生きていたわけで吉宗の存在は知つていたはずである…。

しかし今となつては確かめる術はなく天一坊自身、己の賢さを主張するためだつたか、あるいは本当のことだつたかはともかく「吉」の字を大切に思へと母から言われたのは物心ついた三歳前後からと証言したそのことを持つて大岡は御落胤は騙りだと決めつけたのだつた。

また春貞は天一坊吟味の際、公事場奥から天一坊の様子を詳細に観察していたが、天一坊の耳は吉宗と同じく立派な福耳であつた。

しかし決定的な証拠もまた見つからなかつた。天一坊が持参した短剣は確かに本物の徳川紋を持つ名刀でありにわか作りのまがい物ではなかつた。ただしその名刀が吉宗：いや、頼方の手から天一坊の母に渡されたものである確証もなかつた。

もともと大岡の責任は単に御落胤が本物であるかを詮議するだけに留まらなかつた。吉宗自らが「お前に任す」と言わしめたその言葉の重みを背負わざるを得なかつたのである。

吉宗とて人の子の親であり、もし心当たりがあるとするればひと目会つてみたいと思ふのは人情であろうが、それが許されない立場であること、非常に危険なことであることを承知していたのだつた。

大岡は「お前に任す」と命じられたとき、吉宗は「御落胤が本物であつても闇に葬れ」と命じられたも同然と考えていたのだつた。

それは万一御落胤が本物であつた際の混乱の大きさと幕政に与える負の影響が大きいからであつた。

天一坊が本物の御落胤であると認めたら当然それなりの処遇を与えなければならぬし、それは単に大名につけるといふだけに留まらない。

吉宗の長男長福丸（のちの徳川家重）誕生が正徳元年（一七一二年）十二月二十一日だつたから天一坊の方が年上である。であるなら長幼之序からすれば次期將軍の座の可能性も否めない。

しかしである。理由はともあれ、三十路近くにもなつていきなり城に上がり大名だ次期將軍だと騒がれたら幕政だけでなく世の混乱は必定であろう。

そして本人の素行の良し悪しはもとよりだが、地位と権力を得ればいつの時代も有象無象の素性も分からぬ取り巻きが集まり、幕政に影響を与えるに違いない。

大岡越前と松平春貞はその一点に大いなる不安を感じていたのである。したがつて御落胤などあつてはならないのである。

「大岡さま。これでよろしかつたのです」

春貞はそう自分にも言い聞かせるように言葉に出した。

「さよう。まかり間違えばこの日の本が再び戦火に包まれることになるやも知れぬ。それは命をかけても守らねばならぬ…春貞どの」

「はい。今回の判断が万一間違っていたとするなら、それは閻魔の前で知れることとしような大岡さま」

「確かに、確かに。春貞どのと二人並んで閻魔と丁々発止ができますかな。それは楽しみでございますな」

やつと大岡の口から冗談が飛び出した。

そのとき、南町奉行所執務部屋に初夏のような一陣の風が入り込んで二人の頬を撫でた。

あとがき

本編は原稿用紙に換算して七十枚ほどの短編である。

実はご承知の方も多いと思うが「松平藤九郎始末（三）首巻き春貞外伝」で一連の時代小説は完結と宣言し、すべてを見直し一部の表紙を改変して「決定版」として整えたものの、おかしなことに心にぽっかりと穴が空いたような気持ちになった。

そもそもがこの時代小説「首巻き春貞」はボケ防止を目的に執筆を開始したのであった。したがって一冊書けば気が済むだろうと考えていたものの次から次へとアイデアが湧き出て結局全部で二十巻にもなってしまった。

そしてありがたいことに少なからず読者もおいでだが、書き手がこれほど楽しいと思っただけではないほど充実した日々であり、心の一旦は常に江戸中期の松平春貞の屋敷にあつたともいえる。

さて、というわけで空虚な心の穴を埋めるためにオムニバス編ともいえる短編を書いてみたわけである。

「首卷き春貞」の年代背景は小石川養生所が開設された享保七年（一七二三年）十
二月初旬からスタートし、主人公松平春貞は勿論、八代將軍吉宗と江戸南町奉行
大岡越前守忠相が重要な役割を果たす時代小説である。

であるなら本来、享保十三年から十四年にかけて起きたといういわゆる「天一坊
事件」は書かずにいられない大きなテーマであるはずだが、その時代を描いた

「首卷き春貞（五）誕生」執筆当時、筆者の力量では小説としてどのような描
くかがはつきりできず、結局事件を意図的に無視した経緯があつた。

そんなわけで今回短編のオムニバスを書くにあたり、この「天一坊事件」にスポ
ットを当て、特に大岡忠相の裁く苦悩を描いてみようと思ひ立つた。

とはいえこれは小説だからして歴史としての事実は事実としてもストーリーは無
論フィクションである。

いや、実はこの「天一坊事件」は「大岡政談」に収録され、大岡忠相の名裁きの
一つとされていることでもあり、小説や芝居あるいは映画など様々な作品があ
る。

しかし史実を言えば、このとき南町奉行大岡忠相は町奉行支配地外での事件のため、当該事件に実際には全く関与していないのだ。

実際には天一坊は勘定奉行、稻生下野守の裁きを受けて死罪となり、鈴ヶ森刑場で獄門になっている。

さて、奇遇といえは奇遇な話しだが、天一坊が処刑されたのは小説の中にあるとおり享保十四年（一七二九年）四月二一日だがこれは無論旧暦で、新暦に換算すると五月十八日となる。

書き始めたときに気がついたわけだが、まさしく天一坊の命日が目前となった数日で書き上げたのがこの短編となった。

二〇二〇年五月十五日

東京都多摩市の仕事部屋にて

松田純一

主な参考文献・資料

- 安藤優一郎「江戸の養生所」
ディアゴステイーニ「週刊江戸 小石川養生所の開設」
酒井シヅ「まるわかり 江戸の医学」
青木歳幸「江戸時代の医学 名医たちの三〇〇年」
菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
森田健司「江戸の瓦版 庶民を熱狂させたメディアの正体」
江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸の用語辞典」
江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」
野火迅「使ってみよう 武士の日本語」
山田順子「江戸の暮らしがわかる本」
稲垣史生「江戸時代大全」

- 大森洋平 「考証要集 秘伝！NHK時代考証資料」
- 人文社 「切絵図・現代図で歩く 江戸東京散歩」
- 立川博章 「大江戸鳥瞰図」
- 柳生宗矩／渡辺一郎 「兵法家伝書 付・新陰流兵法目録事」
- 柳生耕一平厳信 「負けない奥義 柳生新陰流宗家が教える最強の心身術」
- 村山知義 「無刀の伝 柳生新陰流極意」
- 新人物往来社 「剣の達人一一一人 データファイル」
- 人文社 「江戸庶民の食風景 江戸の台所」
- 松下幸子、榎木伊太郎 「再現江戸時代料理」
- 大野恵造 「江戸小唄総覧」
- 江戸風土研究会 「地図で読み解く江戸・東京」
- NPO法人宗春ロマン隊 「徳川宗春伝」
- 深井雅海 「江戸城御庭番―徳川將軍の耳と目」
- 若桜木虔 「御庭番通史」
- 高埜利彦 「日本の歴史（十三）元禄・享保の時代」
- 氏家幹人 「大江戸死体考―人斬り浅右衛門の時代」

塩見鮮一郎 「弾左衛門とその時代」

塩見鮮一郎 「資料 浅草弾左衛門」

塩見鮮一郎 「江戸の非人頭 車善七」

浜尾四郎 「殺された天一坊」

Wikipedia

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

くびま はるさだ てんいちぼう じけん いぶん
首卷き春貞 (外伝) 天一坊事件異聞
首卷き春貞外伝

2020年5月24日 第一刷

まつだ じゅんいち
著者：松田純一

<http://www.mactechlab.jp>

表紙デザイン：Junichi Matsuda
